

霞×すずめ編

第二章

「へえ…これが霞の彼女かあ」

「なんか意外。もったこうモテモテ！　みたいな女と付き合うのかと思ってた」

「なあ、名前なんて言うの？」

「おい、お前ら何食うんだよ。あ、彼女さんは何にします？」

「えっと…」

目の前に顔面がキラキラと輝いてる4人の男たちが座っていて、すずめはそ

の眩しさに思わず目を細めてしまう。

「おい、一気に喋るな。すずめちゃんがびっくりしてるだろうが」

隣に座っている霞がファミレスのテーブルに肘をついて、男たちを睨んでいる。ソファ席に座った男4人たちは「ごめんね」と口々に言いながら食べ物を注文していた。

「すずめちゃん、改めて紹介するね。こいつらは俺の淫魔友達」

「僕はこの前お店で会ったよね？ 湊美（みなみ）って言うんだ。よろしく」
「あ、よ、よろしくお願いします」

いかかわしいお店ですずめの対応をしてくれた美しい青年に、すずめはペコリと頭を下げる。湊美は、にっこりと笑った。

「じゃあ僕が後の野郎ども紹介するね。一番右の黒髪ツンツンが治（はる）、その隣のセンター分けが伊織（いおり）、んで一番端っこが真斗（まなと）」

「あ、し、下北すずめと言います！ この度は日暮君とお付き合いすることになりました！お 友達みなさまもどうぞ末永くよろしくお願いします！」

「よろしく」

みなヘラリと笑って頭を軽く下げてくれた。

（と、特に何か言われることもなくて良かった…）

大事な友達に変な女ができたと思われていないかと、今日の食事会の一週間前から悩んでいたすずめはホッと胸を撫でおろす。

「わ、私も食べます！」

「はい、メニュー」

「ありがとうございます！」

すずめがメニューに夢中になったところで、すずめに分からないように湊美以外の淫魔三人がうろんげな視線を霞に向ける。霞は無表情のまま「こっちを

見るな」とでも言うように手をシッシツと払った。

「日暮君は何にしますか！」

「俺はハンバーグにしようかな」

すずめに蕩けた笑顔を見せる霞を見て、三人は小さく溜息を吐く。湊美だけがニコニコと楽しそうにそんな二人を眺めていた。

「それで湊美は中学からの付き合いなんだ。本当にたまたまお互いに淫魔として覚醒して。んでほかの三人はそれからぼちぼち淫魔コミュニティの中で仲良くなったって感じ」

「そうなんですか…」

パフェまで食べてお腹いっぱいのおすずめはふんふんと頷きながら霞の話を聞いていた。

「そうそう。淫魔特有の悩みとか色々話してたら仲良くなってさあ」

「淫魔特有の悩み…」

すずめが小さく呟くと、湊美が頷く。

「淫魔も淫魔で色々大変なんだよ。エッチしてくれる人探さないと、メンタルぐちゃぐちゃになったりする子もいるし。…まあ、霞はもう心配ないと思うけど」

「…」

湊美の言葉に霞はちらりと視線だけを向けた。

「それと霞はあの店で働いてる訳じゃないから心配しないで。あの時は、前に霞が話してた子に君がよく似てるなあと思って僕が連絡したただけだから」

「なるほど…」

（日暮君、私のこと友達に話してたんだ…）

すずめがちらりと隣に座る霞を見る。

「ん？」

頬杖を突いて退屈そうにしてる霞が、柔らかな笑みを浮かべてすずめを見てくれる。

「な、なんでもない……よ」

その甘い顔がくすぐったくて、すずめは顔を赤くして俯いた。

「……そろそろ帰ろう。送っていくから」

「え……でも」

「いいから。……もう顔合わせは済んだでしょ」

「まあまあ、あと一杯くらいは付き合えよお」

「そうだそうだ〜！」

「可愛い女の子独り占めして！」

「…うるせえなあ」

霞が不機嫌そうに低い声を出す。今にも霞が3人に食って掛かりそうで、すずめは「わ、私ももう一杯コーヒー飲みたいので、ちよつと取ってきます！」と言ってドリンクバーへと向かった。

「…なんか、日暮君、ちよつと機嫌悪い…？」

「…なあ、あんた」

「はい？」

後ろから声をかけられ振り向くと、そこには湊美が最初に紹介した治がいた。霞より少し身長は低いが、すずめからしたらとんでもなく大きい男が上から見下ろしてくる。

「あ、あの…」

「…やめとけよ。どうせ無理だって、あんたみたいな女じゃ」

「あ……」

治がゆつくりと言い聞かせるように話し続ける。

「悪いことは言わない。淫魔なんかに関わるな。……あんたすごく性格良さそうだし、可愛いし、すぐ彼氏なんてできるだろ。淫魔なんて見た目がいいだけの屑しかないんだから……」

「ひ、日暮君は屑じゃないです！」

すずめはコーヒークップを台の上に置き、ぐんぐんと治に詰め寄る。

「は……っ？ あ……？」

「日暮君は屑なんかじゃないです！ 日暮君とエッチしてきた女性で、日暮君のことを悪く言う人なんて一人もいません！ みんな、優しく丁寧に抱いてくれるって言ってました！ とっても幸せな時間だったって言ってました！」

「そ、それは淫魔だから……」

「違います！ 日暮君が優しくとつても素敵な男の子だからです！」

「素敵な男の子って……。ただ性欲に支配されたヤリチン野郎だろ？」

治が馬鹿にしたように口角を上げる。それを見て、すずめの怒りが頂点に達した。

「なんなんですか、あなたああああ！」

「おわっ！」

すずめが治の至近距離まで近づき、下らか吊り上がった目で睨みつける。

「失礼ですよ！ 日暮君にとっても失礼です！ いいですか？ そりゃあ淫魔として色々大変なことはあると思います。人間と淫魔の違いで苦しむこともあるでしょう！ でもそれは人間同士でも同じです！ 性格も家庭環境も価値観も違う人同士が恋人同士になるんですから、ぶつかり合うことだってあるんです！ それを乗り越えていくんですよ！」

「だ、だから…淫魔だとそれが…！」

「淫魔でも乗り越えるんですよ！」

「っ！ あんたは淫魔の性欲を知らないから…！」

「私だって性欲旺盛ですよおお！」

「っ！」

そう大声で叫んだ後、すずめは我に返る。

「あ…あ…」

「いや…あの、すまん…そこまで言わせる気は…、だ、大丈夫か？」

治がすずめに手を伸ばしてくる。

「すずめちゃん…？」

後ろから大好きな人の声が聞こえる。振り返ると、困った顔をした霞が立っていた。

「つゝつゝ！ あなたなんて大っ嫌いですよ！」

すずめはドンッと治の体を押しやると、霞の横を通り過ぎて、全速力で店から出て行ったのだった。

「うああああん！」

すずめは自宅の玄関で体育座りをしながらヒンヒンと泣き続けていた。

「せつがく！　せつがく可愛くしていったのにいい！」

綺麗にメイクした顔は涙と鼻水でぐしゃぐしゃになってしまっている。

霞から「自分の淫魔の友人を紹介したい」と言われたのは2週間前。霞がすずめと付き合うことを了承してくれた後、「淫魔としても、友達としても仲良くしてる奴らだから。俺に何かあった時に力になってくれると思う」と言ってくれたのだ。そして、すずめが少しでも嫌なら会う必要はないとも言ってくれ

た。

すずめはもちろん会うとすぐに返事をした。霞が自分のこと、内面をすずめに開示しようとしてくれていることが嬉しかったのだ。それに、霞の友人に気に入ってもらって、少しでも自慢の彼女だと思ってほしかった。新しい洋服も買って、気合を入れて今日を迎えたのに。

「何が性欲旺盛だよお……」

公共の場でそんな発言をするなんて、破廉恥にも程がある。先ほどからずつと霞の困惑した顔が頭に浮かんでは消えていく。

「うううう、どうしよう！ 引かれてたらどうしよおおお！」

何が「日暮君の笑顔を守りたい」だ。最初から思いつき困惑顔をさせてしまっているではないか。

「うおおお……！ なんて、私はダメなんだあああ！」

ずずずと鼻水を吸りながら、顔をぐしゃぐしゃにして泣いていると、なぜか玄関の扉の向こうからクスクスと笑う声が聞こえてくる。その声の主を、すずめが分からないはずはなかった。

「なんで笑ってるんですかあ！」

「あつはつは、ごめんごめん。…あんまりすずめちゃんが可愛いから笑っちゃった」

「可愛くないです！ ただの痴女です！」

「あははは！ じゃあ淫魔の俺とお似合いだ！」

コンコンと扉がノックされる。

「ほら、開けてよ、すずめちゃん」

「ごんなぐちやぐちやな顔で会えません…！」

「寒くて風邪ひきそ〜」

「今すぐ開けますう！」

すずめが急いでドアを開けると、声を上げて笑いながら霞が玄関の中へと入って来た。

「やっぱり可愛い顔してる」

「可愛くないです…っん♡」

玄関に座り込んでいるすずめに前に霞がしゃがみ込み、ちゅ♡と音を立ててキスをする。

「ん♡…ふ…んっ♡…あん♡」

「ん…♡ふ…すずめ…♡」

「ん♡♡」

低い擦れ声で名前を呼ばれ、すずめは胎の奥がきゅん♡と甘く疼くのを感じる。思わず霞の服を縫るようにぎゅうっと握り込んでしまった。

「はあ…ん…」

ちゆる♡と舌を抜かれたすずめがぼんやりと霞を見ていると、腰を抱かれて立ち上がらせられた。

「日暮…君？」

「俺んち来て」

「なん…で？」

「エッチしたい」

「えっち…？じゃ、あ、うちでもいいんじゃない？」

「可愛すぎるって。健気で素直で優しすぎて…。ああ、もう！俺、すずめちゃんに狂わされっぱなしだわ」

霞がすずめの耳元で囁く。

「死ぬほど潮吹かせて気が狂うくらい子宮口挟ってやりたいんだよ。前、お店

でしたよりもっと激しい交尾がしたい。お潮もおしっこも全部お漏らししたいからうちに行こう。すずめちゃんの部屋、汚したくない」

「ひっ…♡」

霞が先ほどと同じ声で囁きながら、すずめの耳を舐めしゃぶる。

「まずはまんこの中に舌入れて、いっぱい濡らしてあげる。くぶくぶ♡って言うまで濡れたら次は手マンね？ 指、Gスポットに当ててコチュコチュしまくってやるから、いっぱいアンアン喘いでね、興奮するから。おまんこ肉がトロトロのふわふわになったら、勃起汁ダラダラの生ちんぽ、形が分かるぐらいゆっくり挿れてあげる。ああ、淫魔は自分で妊娠する精液とそうじゃないやつ、どっち出すかコントロールできるから安心して♡そのあとは、クリ扱きしながらいっぱい子宮口、ちん先で挟りまくって虐め倒してあげるから♡」

「あ…う…う♡…ひい…♡」

ビクビクと体を震わせながらも自分に体を預けるすずめを見て、霞が舌なめずりをする。

「好きだよ、すずめ。俺のために喜んで、怒って、悲しんで、笑って……。俺で一喜一憂するすずめを見るのが嬉しくてたままない。すずめが可愛すぎるお礼に、俺の淫魔としての力、全部使ってすずめのこと気持ちよくさせて？」

「う……ん♡」

霞がとろお♡とすずめの口の端から溢れた唾液を舐めとって、嬉しそうに笑った。

治×七菜子編

第一章

宮部治（みやべ・はる）。私の元カレ。私を裏切った人。

——そして、いつまでたっても忘れられない人。

「あっつい…」

「お疲れ、七菜子（ななこ）」

大学の講義が終わり、外に出ると、ギラギラと輝く太陽に肌がじりじりと焼かれる。

「まだ夏にもなっていないのに…」

「七菜子、まあた日焼け止め塗ってないの？ 肌、焼けちゃうよ？」

「いいの、もともと地黒だし」

黒い髪をポニーテールにした七菜子がつこりと元気に笑う。それを見て、七菜子の大学の親友であるえみりはつられるように笑みを見せた。そして、七菜子の隣を一緒に歩き出す。

「元気になって良かったよ、七菜子」

「うん、元気元気。すっごく元気！」

「…治君と別れた時は、どうなるかと…」

「…もうあの男の話はしないで」

「そう…、だね」

七菜子はえみりに固い声で返事をした。えみりはちらりと七菜子の顔を見た後、小さく頷く。

「ごめんね、思い出させちゃって…」

「いいの！ まあ、とにかくあんな浮気淫魔野郎のことなんか考えるのは時間の無駄！ もっともっと楽しいこと考えないと！ ほら、もうすぐ夏休みですよ！ 旅行とかさあ、一緒に行こうよ！」

「うん！ それ楽しそう！ 計画とか立てようよ！」

えみりとの話に夢中になってしまっていた七菜子は、前に人が立っていることに気付かず、その大きな背中にぶつかってしまう。

「あ、ご、ごめんなさいっ！」

「いや、大丈夫…」

「っ！」

目の前の大きな男が振り返る。黒髪に海のようにキラキラと輝く青い瞳。そしてこの世のものとは思えない程に整ったその顔立ち。

「い、行こ、えみり！」

「あ、七菜子！」

七菜子は目の前の男が口を開こうとする前に、踵を返し、その場を後にした。

「…」

七菜子の元カレである治がその背中をずっと見つめ続けていた。

「治…？ なん…で…？」

——サプライズで家に行ったのが悪かったのだろうか。

大学のバスケット部に所属し、エースとして活躍する治がインカレで優勝し、優秀選手として表彰された。そのお祝いをしようと思ったのだ。精悍な顔つきに似合わず、甘いものが好きな治のために、予約したホールケーキを持って、渡

された合い鍵を使い、中に入った。

「治、インカレでの表彰、おめでとぉ〜！」

勢いよく寝室のドアを開けて、クラッカーを鳴らした。

「はあ…はあ…はあ…」

「あ…んう♡」

「ええ…？」

いつも一緒に寝ている治のベッド。その上に上半身裸の治と見知らぬ綺麗な女性がいた。女性の上に治が覆いかぶさり、布団で隠れた下半身をゆさゆさと揺らしている。

「あ…？ ああ…七菜子…♡七菜子だあ…♡七菜子…♡」

「あ…♡治くうん♡」

美しい女が治の首にしがみつき、首筋にちゅう♡と吸い付いた。

「っ！」

息ができない。

目の前の光景が信じられない。

（だって…だって…治は…、すっごく私のこと大事にしてくれて…私だけの彼氏で…淫魔だけど私だけとしかエッチなことしないって…）

「治…？」

「あ…？」

熱に浮かされたような顔のまま、治がこちらを見る。そしてヘラリと笑った。

「する？」

「っ！ 死ね!!」

「きゃあ！」

怒りで我を忘れた七菜子は、ケーキが入った真っ白な箱を二人に向かって投げつける。女は悲鳴を上げ、治はぼーっとした顔で黙っていた。その後、合い鍵も投げ付けてやった。

「別れる！ 死ね！ 最低！ あんたなんて一生女に腰振ってろ、この節操なしっ!!」

泣かない。

こんな最低な男の前で涙なんて見せたくない。

七菜子は涙があふれる前に治の部屋から出て行ったのだった。

「あ、これ…治の…」

えみりと大学で別れ、自宅アパートに帰って来た七菜子は洗面台に置いてあるメンズ化粧水のボトルに視線を向けた。バスケットが好きで、外でストリートバスケットをすることも多い治は、肌が赤くなりやすく、少しお高めのメンズ化粧水を使っている。

「勝手に捨てたら…流石に可哀そうかな」

七菜子は、ボトルの写真を撮ると、スマホで治とのチャット欄をタップした。

「…」

チャット欄は、1か月前、「もう別れる」と七菜子が送ったメッセージに治から「分かった」と送られてきて以来、全く動いていない。

「…言い訳もしないで」

七菜子はギリギリと強くスマホを握り込み、唇を噛みしめる。そう、あの日、治から言い訳のメッセージや電話は一切来なかったのだ。

「……浮気、したかったんでしょ、どうせ」

——エッチが上手じゃないマグロ女に、何の価値もなかったのだろう。

「……郵便で送ればいいか……っあ！」

チャット欄を閉じようとした七菜子は、手を滑らせてしまい、先ほど撮ったボトルの写真を治に送ってしまった。

「あ、や、やばい、と、取り消し……っ！ ……あ」

七菜子が慌ててメッセージを取り消そうとするが、その前にメッセージが既読になってしまった。そして、すぐに電話がかかって来た。

「っ……あ、ど、どうしよう」

七菜子はスマホを両手で掴み、その場に立ち尽くす。スマホはぶーっと震え

ながらずっと着信を七菜子の手に伝えてくる。

「…っ！」

七菜子は思い切って通話ボタンを押した。

「も、もしもし！ ごめん、突然変な写真送って。私の家に、治の…っえーつと、宮部君の化粧水が置いてあって、確か結構高かったと思うから勝手に捨てたら良くないかなって思っただ、だから、あの、郵便で送らせてもらうから心配しないで！ じゃあ！」

七菜子は治の返事も聞かずに、通話を切ってしまう。

「はあ…はあ…、ちょっと…失礼だったかな」

（で、でも…ほかの女の人とエッチなことした治の方が悪いんだから！）

もう一度、電話をかけた方がいいだろうかと七菜子が悩んでいると、ピロンという音とともに治からメッセージが送られてきた。

『ありがとう。迷惑だと思うが、頼めるか？』

「っ……！」

——いつもこうだ。

きつと、自分が治と話しづらいことを察して、通話ではなくメッセージで返してくれたのだ。

付き合っている時もそうだった。治はいつだって七菜子のことを優先してくれた。七菜子のことを気遣い、いつだって歩幅を合わせてくれていたのは治だった。

「…どうして？」

七菜子の震える小さな声に返事があるはずもなかった。

湊美×桃音編

第一章

「あ、れ…？　湊美君…？」

「……」

「え、あ、ちょ、ま、待って…！」

夜の繁華街、多くの人が行き交う街中で、佐賀桃音（さが・ももね）は、一瞬だけ目が合った男を必死に追いかける。

「お、おねが…っ！　待って…待って、湊美君…っ！」

美しい群青色の瞳。髪色は変わっていても、その瞳だけは変わらない。桃音がずっとずっと大好きだったあの色だ。

「湊美君…っ！　お願い…湊美…君！」

桃音は足を動かし、美しい銀髪の青年を追うが、すぐに雑踏に消えてしまった。

「湊美君……」

「桃音は眉を下げ、立ち尽くしていた。」

「はあ……」

「あれ？ 桃音さん、なんか元気ないですね！ 大丈夫ですか？」

「うん、ありがとう。大丈夫だよ」

桃音は勤めている和菓子屋さんでバイトをしている大学生のすずめに、にっこりと微笑む。しかしすずめは納得していないようで、「いえ！ その顔は絶対に元気がない顔です！ 無理して笑っている顔です！」と詰め寄ってくる。

「そうかなあ……」

桃音は自分の白くてふっくらとした頬をぐにぐにと揉み込む。身長160センチ、体重65キロと体がふっくらしている桃音は、いつもおっとり穏やかで笑顔を絶やさないと有名だった。そんな桃音がしょんぼりしているのを見て、ほかの従業員たちもわらわらと集まってくる。

「桃音ちゃん、体調が悪いなら今日はもう上がりなよ。もう閉店の時間だし、締めはこっちでやっとくから」

「で、でも…」

「ごめんね、すずめちゃん。悪いけど桃音ちゃんのこと頼んでいいかな？」
「もちろんです！」

ベテランパートのおばさんから頼まれたすずめはてきばきと帰り支度を終わらせ、桃音の荷物も持ってくれる。

「ほら、桃音さん、帰りましょう」

「ほ、ほんとに体調不良じゃないの…!」

「はいはい、お疲れさん! 明日から、店は2日お休みだからしっかり休みなさいね!」

ひらひらと手を振ってくれるパートのおばさんに、桃音は深々と頭を下げたのだった。

「会いたい人がいる…?」

「うん、実はそうなの…」

道中、桃音は先週のことをすずめに話すことにした。コンビニ前で買ったカフェオレを飲みながら、会話を続ける。27歳にもなる自分が年下の大学生に悩み相談をするなんて恥ずかしいが、若い子の方がいい案を思いついてくれるかもしれないと思ったのだ。

「それってどんな人なんですか…？」

「えっとね…、この前、街中で数年ぶりに見かけたの。声を掛けたんだけど、聞こえなかったのか、そのまま見失っちゃって…。あ、昔の写真ならあるんだけど…」

桃音は自分のスマートフォンをタップし、まだ自分と彼が仲良かった頃の写真を表示し、すずめに見せる。

「えっとね…湊美君って言うんだけど…」

「……わお」

すずめが目を見開いた。

「という訳で連れてきてもらいました！」

「み、湊美君…！」

「……はあ……」

桃音は、目の前にいる自分の大事な幼馴染に駆け寄ろうとするが、当の本人の湊美は、顔を顰めて後ろに下がった。

「……僕、すずめちゃんと霞の三人で飲むって聞いて来たんだけど？　ほかの人がいるなんて聞いてないよ？」

「あ……そ、その……私が頼んだの。ごめんね、湊美君」

「……名前、呼ばないでよ」

「っあ……ご、ごめん」

ジロリと湊美に睨まれて、桃音は曖昧に笑った後、俯く。

「……湊美」

「霞には関係ないでしょ」

「……いいのか？」

「いいよ別に。…もう関係のない人だし。これから関わるつもりもない」

「…」

湊美の冷たい声音に、桃音が俯きながらぎゅうつとスカートを握り込む。

「み、湊美君!? な、なんでそんな冷たい言い方を!? いつもの優しいきゆるんな湊美君はどこに!」

「ああ! もういいから! すずめちゃんは黙っと言ってよ!」

「酷い!」

「ああ、もう!」

桃音は湊美がすずめとその彼氏と紹介された霞とやいやい言い合っているのをボーッと眺めていた。そして、誰にもバレないように唇を噛みしめた後、口を開く。

「ごめんね、湊美君。元氣かどうか確認しただけなんだ。おせっかいだ

ったね。用事はそれだけなの。すずめちゃん、今日はありがとう！　また今度お礼させてね。じゃあ」

おっとりとした口調で言い切った桃音は、ぺこりと頭を下げ、歩き出す。すずめに自分の名前を呼ばれると、振り返って小さく手を振り、また足を動かしてその場を離れたのだった。

「…」

（私…、湊美君に会ってどうするつもりだったんだろう）
俯いて歩きながら、桃音は考えに耽っていた。

森戸湊美（もりと・みなみ）。桃音の5歳年下の22歳で、とんでもなく顔が整った美の化身。もともと顔立ちが整っていたが、高校生の時に、遺伝子変異で淫魔となり、その美しさに磨きがかかった男。

桃音は、湊美の家のお隣に住んでいて、家族ぐるみですっと仲が良かった。そして、湊美も人一倍、桃音に懐いてくれていたのだ。

湊美はどこに行くでもずっと桃音の後ろを付いてきた。桃音がどこかに出かけようとする気配を察すると、玄関の外で帽子とリュックを背負って待っていた。

「僕のこと、連れて行かないなら、ここで泣きわめく」と言って、目を潤ませて、可愛く桃音のことを脅すのだ。桃音はそんな湊美が可愛くて可愛くてたまらなかった。

ずっと一緒に育ってきた。年は離れているけれど、できるだけ待ち合せて一緒に登下校した。すすくと大きくなる湊美はどんどん綺麗になっていく。

「僕以外のものになったら許さないからね」

顔を赤らめ、下から自分を睨みつけてくる湊美の頭を、桃音は愛おしげに撫でていた。

幸せだった。

その幸せは突然終わりを告げた。高校生になり、湊美が淫魔として覚醒して少し、桃音は突然絶縁を言い渡されたのだ。「もう会わない」と言われ、連絡も無視された。話をしたくて何度も家まで会いに行ったが、湊美とちゃんと話すことは叶わず、高校卒業後、湊美は都会へと引っ越して行ったのだ。

「…とにかく元気そうで良かった…っあ！」

考えごとをしながら歩いていたせいで、桃音は転びそうになってしまう。

「ひゃ…!!」

しかし、その前に後ろから手を引かれて地面に倒れ込むのを免れた。

「あ……え……？」

慌てて桃音が振り向くと、そこには無表情の湊美の姿があった。湊美は桃音の腕をグイッと引っ張って、体勢を元に戻してくれる。

「あ、ありがとう、湊美君……」

「……」

湊美は何も言わずに桃音の手を離し、踵を返して歩き出そうとする。

「あ！ ま、待って、お願い、湊美君！」

桃音は、必死にその背中を追いかけて、シャツを掴んだ。

「あ、あのね、私、湊美君に話したいことが……！」

「……僕には話したいことなんてない」

「あ……」

「……二度と僕の前に現れないで」

「っ！」

冷たい声音と冷たい視線。

あんなにも優しさを湛えていた海色の瞳は、今はこんなにも冷え切っている。

「湊美……君……」

「……」

湊美はそのまま桃音の手を振り払い、前回と同じように人込みに消えていった。